『賛美のいけにえ』　ヘブル人への手紙 13 章 7～15 節

1.　生き方

イエス様を救い主として信じ、救いの喜びに与った人の最大の印は何でしょうか。それは生き方が変わるということです。そういう人は、自分の思いや考えではなく神の御心に歩むことを求め、苦難の中にあっても最後まで忍耐して、天の御国を目指して最後まで信仰のレースを走り抜きます。たとえこの世に心が奪われることがあっても、イエス・キリストにしっかりと留まります。そして、兄弟愛をもって互いに愛し合い、旅人をもてなし、牢につながれている人や苦しめられている人たちを思いやるのです。また、金銭を愛する生活ではなく、いま持っているもので満足します。つまり、イエス・キリストの愛に生きるのです。その愛を軸にした生き方が今日の箇所でも勧められています。それは神に喜ばれるいけにえをささげるという生き方です。

7 節に「**神のことばをあなたがたに話した指導者たちのことを、覚えていなさい。彼らの生き方から生まれたものをよく見て、その信仰に倣いなさい。**」とあります。この節は教会の設立者たちについて述べています。ヘブル人への手紙が書かれた時点ではすでに彼らのうちの少なくとも一部はこの世を去っていました。この教会はできたばかりのものではなかったのです。とはいえこの教会がどのくらい前に設立されたものかはわかっていません。

私たちのキリスト者としての生き方ははたしてこの教会の設立者たちと同様に他の信徒たちにとっても模範となるものでしょうか。

6 節で、「**主は私の助け手。私は恐れない。人が私に何ができるだろうか。**」と言って、いよいよこの手紙を終えようとした時ふと思い出したかのように、ここで一つのことを書き加えています。それは教会の指導者たちのことです。神の御言葉を彼らに話した指導者たちのことを思い出し、その生活の結末をよく見て、その信仰にならうようにと勧めました。いったいなぜここで教会の指導者たちのことを取り上げたのでしょうか。おそらく彼らが信仰に堅く立ち続けるためにどうしても必要であることを述べたかったからでしょう。それは神の御言葉です。教会が教会であるために最も重要なことは神の御言葉を正しく教え、宣べ伝えることです。御言葉が正しく教えられなければ、信仰に堅く立ち続けることはできません。ですから神の言葉を彼らに話した指導者たちのことを思い出し、その信仰の結末をよく見て、その信仰にならうようにと勧められているのです。

しかし、どんなにすぐれた指導者でもやがては過ぎ去ります。いつまでも生きていて指導することはできません。ですから、そのように指導者たちの教えを思い出し、彼らの生活の結末をよく見て、その信仰にならいながらも、最終的にはいつまでも変わることがない方に目を留めなければなりません。それはイエス・キリストご自身です。

8 節に「**イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。**」とあります。キリスト者の生活はそれがイエス様に結びついているかぎりにおいてのみ模範的でありえるのです。現代の私たちは様々な過去の時代に生きたキリスト者たちの模範に倣うことができます。彼らの人生の基盤は私たちのものと共通しているからです。それはイエス様とその贖いの御業です。なぜなら、「**イエス・キリストは、昨日も今日も、とこしえに変わることがありません。**」この方が、私たちの本当の指導者であられるということは、何と幸いなことでしょうか。人はどんなに立派な指導者であっても、やがて死にこの世から去って行かなければなりませんが、私たちのイエス様は永遠に生きておられ、いつまでも変わることなく、私たちを助け、慰め、励まし、力づけてくださいます。この方がいつも私たちの直ぐそばにいてくださるということが分かれば、何も恐れることはありません。

2.　迷わされないように

ですから、9 節に「**様々な異なった教えによって迷わされてはいけません。食物の規定によらず、恵みによって心を強くするのは良いことです。食物の規定にしたがって歩んでいる者たちは、益を得ませんでした。**」とあります。この節は異端を吹聴する人々について再度警告しています。彼らはイエス様のうちに留まらなかったのです。彼らの「霊的な生活」は神の御業にではなく食物規定等の人間の行いに基づいていたのです。

この手紙が書かれたころ初代教会では、禁欲を重んじるユダヤ教の一派であるエッセネ派の影響が強かったらしく、ある種の食べ物や飲み物を禁じる異端の教えがはびこっていたようです。それは、コロサイの教会にも入ろうとしていたようで、パウロはコロサイの教会への手紙の中 2 章 14 節で、「**こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判することがあってはなりません。**」と言及しています。こうした異端的な教えは、このような律法を守っていないと救われないと教えていました。すなわち、信仰だけではだめで、信仰にプラスして何らかの行いが必要だと教えていたのです。こうした教えがこのヘブル人キリスト者たちの間にも忍び込んでいました。

時代や世界がたえず変わっていく中にあってもキリスト教信仰の基礎にあるものは決して変わりません。少なくとも本来それは変わるべきものではありません。とはいえこのことはキリスト教会が様々な時代に色々な形をとってあらわれることがあってはいけないという意味ではありません。すべての時代はそれぞれ対峙すべき固有の問題を抱えており、キリスト教会はそれらにふさわしい対応の仕方を考えていかなければなりません。しかし問題に対処する際の基となるものは同一であり続けるのです。

私たちが救われるために必要なすべての御業は、十字架によって完了しました。イエス様は、十字架の上で「**完了した**」と言われました。ですから、私たちはそのイエス様の御業に感謝して、イエス様を信じるだけでいいのです。ただ感謝して受け取るだけでいいのです。だから、「恵み」と言われているのです。だからその「恵み」にいつも心を留めていなければなりません。そうでないと、振り回されてしまうことになります。

この「**迷わされてはいけません**」の「迷わされる」という言葉は、「振り回される」とか、「吹き回される」という意味です。この言葉は、エペソ書 4 章 14 節にも使われていて、「**こうして、私たちはもはや子どもではなく、人の悪巧みや人を欺く悪賢い策略から出た、どんな教えの風にも、吹き回されたり、もてあそばれたりすることがなく、**」そこでは「**吹き回され**」と訳されています。それはまさに風に吹き回されたような状態のことを言うのです。風はこっちから吹いていたかと思ったら次の瞬間にはあっちの方から吹いてきます。つまり一定ではないのです。どこに吹き飛ばされてしまうかわからないのです。神の恵みにとどまっていないと、そのように吹き飛ばされてします。

ですから、「恵み」によって心を強めるのは良いことなのです。多くの人は「恵み」ではなく、自分の行いによって心を強めようとします。一生懸命に伝道したり、奉仕したり、献金すること自体はすばらしいことですが、そうしなければ救われないとなると大変なことになります。そうではなく、私たちは神に「恵み」によって救っていただいたので、その喜びから溢れてするのです。イエス様が十字架で完了してくださった救いの御業に信頼しその「恵み」の中に身を置くなら、あなたの心は強められるのです。

3.　宿営の外に

11～12 節に「**動物の血は、罪のきよめのささげ物として、大祭司によって聖所の中に持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるのです。それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。**」とあります。ここには旧約聖書における罪が贖われるための儀式とキリストの十字架の贖いの御業を比較して、宿営の外に出ることが勧められています。

旧約聖書では、年に一度、民が犯したすべての罪が赦されるために、大祭司が雄牛と山羊を殺して、その血を取って、天幕の中に携えて行きました。レビ記 16 章 27 節に「**罪のきよめのささげ物の雄牛と、罪のきよめのささげ物の雄やぎで、その血が宥めのために聖所に持って行かれたものは、宿営の外に運び出し、皮と肉と汚物を火で焼く。**」とありますが、天幕の中の一番奥のある至聖所と呼ばれる所に入って行き、そこに置かれた契約の箱の上にその血を振りかけたのです。血を取られた動物の体はどうされたかというと、幕屋の門の外へ持って行き、そこで焼かれました。その体は汚れていたからです。それらの動物はイスラエルの罪を身代わりに負ったので、汚れているとされたのです。汚れたものは宿営の中に置くことができなかったので、宿営の外、幕屋の外へ持って行かれたのです。

ところで、ここには、「**イエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられま**

した。」とあります。これはどういうことかと言うと、**イエス様**も殺されたいけにえの動物と同じように、エルサレムの町の郊外にあった十字架で死なれたという意味です。それはゴルゴタと呼ばれていた場所でした。なぜなら、**イエス様**はいけにえの動物と同じように、人々の罪を身代わりに負われたからです。もともと**イエス様**は**神の子**として全く罪のないお方でしたが、私たちの罪のために汚れた者となって死んでくださったのです。ということはどういうことかというと、**神**の恵みは宿営の中にあるのではなく、宿営の外にあるということです。神殿の中の祭壇や儀式にあるのではなく、十字架で成し遂げられた救いの御業の中にあるということなのです。であれば、そうした神殿の中にとどまっているのではなく、そこから出て、**イエス様**のみもとに出て行かなければなりません。

この手紙は迫害の中にあったユダヤ人**キリスト**者たちに宛てて書かれました。彼らは、かつてのユダヤ教から回心し**イエス・キリスト**を**救い主**として受け入れましたが、そこには多くの苦難がありました。それまでのユダヤ人のコミュニティから追い出されるというだけでなく、時にはいのちを狙われることもありました。そうした中にあって彼らは、こんなことなら**キリスト**者としてあまり目立った行動をせずに、神殿を中心としたかつてのユダヤ教の儀式にとどまっていた方が安全ではないかと考えていたのです。しかし、そこには救いはありません。**イエス様**は、そのようなユダヤ教の伝統やしきたりから彼らを解放するために十字架にかかってくださいました。ですから、そんな彼らに求められていたことは思い切って宿営の外に出て、**神**のみもとに出て行くことだったのです。勿論、宿営から外に出るということは簡単なことではありません。元来、町というのは、外敵から守るために城壁がめぐらされていました。ですから、その城壁の内側にいれば安全です。そこから出るということは危険であることを意味していました。そこには罪を犯した人や汚れた人が住んでいました。普通の人が住めるような場所ではなかったのです。しかし**イエス様**はそのような所から出て、罪人として死なれました。であれば、**イエス様**の弟子である私たちも、そこから出て行かなければなりません。「**今の所から出る**」ことは、確かに一つの大きな決断がいるでしょう。生まれながらの人間はいつも安定を求めますから、これまでの生活から出ようとしないのです。しかし、そこには救いはありません。救いは宿営の外に出た**イエス**の中にあるのですから。

イエス様は、マタイの福音書 7 章 13～14 節で「**狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広く、そこから入って行く者が多いのです。いのちに至る門はなんと狭く、その道もなんと細いことでしょう。そして、それを見出す者はわずかです。**」と言われました。迫害や苦しみはあるかもしれませんが、それを覚悟でその安住の場所から出て、**主**と共に生きる道を選ぶなら、あなたも「**いのちに至る**」のです。いや、そのような苦難の中にあっても、その中に**主**が共にいてくださり、それを乗り越えることができるように助けと力を与えてくだいます。

あなたにとっての恐れは何ですか。あなたにとっての十字架は何でしょうか。どうぞ恐れないで、あなたの十字架を負って、**イエス様**のもとに出て行ってください。そうすれば、あなたも必ずいのちを得ることができますから。

13 節に「**ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。**」とあります。

14 節に「**私たちは、いつまでも続く都をこの地上に持っているのではなく、むしろ来たるべき都を求めているのです。**」とあります。天の都はすでに存在します。ヨハネは、黙示録でそれを実際に見ています。その都が私たちにも真実の姿を現すのを私たちは今もなお待ち続けています。これが**キリスト**者の生き方です。**キリスト**者は、この地上に永遠の住まいを持っているかのようにではなく、天の都を求めているのです。なぜなら、この地上のものは一時的であり、天の都は永遠に続くからです。

パウロは、コリント第二 4 章 18 節で、「**私たちは見えるものにではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。**」と言っています。また、コリント第二 5 章 7 節では、「**私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいます。**」と言っています。私たちは目に見えるこの地上の一時的なものだけでなく、目に見えないいつまでも続く天の都を持っているのですから、その都を求めて生きるべきなのです。

4. 賛美のいけにえをささげよう

15 節に「**それなら、私たちはイエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。**」とあります。キリストが最終的ないけにえを捧げてくださったおかげで古い契約の捧げ物の時代は完全に過去のものとなったことをヘブル人への手紙は強調しています（9 章 11～14 節）。今やキリスト教会にはふさわしい捧げ物がたったひとつだけ残されました。それは感謝の捧げ物です。

旧約聖書には、イスラエルの民が神を礼拝する時には動物のいけにえをささげることが求められていましたが、イエス様が私たちのためにご自分のいのちという最高のいけにえをささげてくださったので、キリスト者にはそのような動物のいけにえではなく、神が喜ばれる霊的ないけにえをげようというのです。そのいけにえとは、どのようなものでしょうか。一つは「**賛美のいけにえ**」、すなわち御名をたたえる「**唇の果実**」です。「**唇**」を通してささげられる賛美と感謝です。

「**唇の果実**」という表現は次のホセア書からの引用であると思われます。ホセア書 14 章 2 節に「**あなたがたはことばを用意し、【主】に立ち返れ。主に言え。「すべての不義を赦し、良きものを受け入れてください。私たちは唇の果実をささげます。**」とあります。この節で「**唇の果実**」とは罪の赦しに対する感謝のことです。

「**賛美**」は、ただ口先だけで歌うのとは違い、主に向かってささげられる心からの「**賛美**」のことです。ですからそれは歌を歌っている時もそうですが、祈っている時にも、いつも「**唇**」からほとばしり出てくるものです。特にここには「**絶えず神にささげようではありませんか。**」と言われています。いったいどうしたらそのようなことが可能なのでしょうか。ですからここには、「**イエスを通して**」とあるのです。イエス様を通してでなければ、絶えず「**賛美**」することなどできません。でもイエス様を見上げるなら、どんな時でも「**賛美**」をささげることができます。

パウロとシラスがピリピで伝道していたとき、占いの霊につかれていた若い女奴隷から占いの霊を追い出すと、もうける望みがなくなった主人から訴えられて、彼らは牢に入れられ、足かせを掛けられてしまいました。そのとき彼らはどうしたでしょうか。真夜中に、ふたりは神に祈りつつ「**賛美**」の歌を歌っていたと聖書に記録されています。すると突然大地震が起こって、獄舎の土台が揺れ動き、たちまち扉が全部あいて、みなの鎖が解けてしまいました。目を覚ました看守は逃げられたと思い、「もうだめだ」と自害しようと思ったとき、パウロは大声で言いました。「自害してはいけない。私たちはみなここにいる。」助かったと思った看守はパウロとシラスのところに駆け込んでくると、ひれ伏して言いました。「**先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか」と言った。二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」**」（使徒 16:30～31）と言うと、彼とその家族は主イエスを信じ、その夜、その家の者全部がバプテスマを受けたのです。

パウロとシラスはそのような状況でも主を「**賛美**」しました。なぜなら、主は「**賛美**」を受けるにふさわしいお方だからです。主は、私たちがいつでも、どんな時でも、主を「**賛美**」することを願っておられるのです。

詩篇 34 篇 1 節に「**私はあらゆるときに【主】をほめたたえる。私の口にはいつも主への賛美がある。**」とあります。これはダビデが敵であったペリシテの王に捕まえ、そこから脱出した時に歌った詩です。この時ダビデはサウル王から逃れペリシテの町に行きましたが、ペリシテまたイスラエルに手は対していた民族です。それがダビデであることはすぐにばれてしまいました。いったいどうしようか悩んだ末に、彼はペリシテの王アビメレクの前で気が狂った人のふりをして、この危機を逃れたのです。その時に歌った詩なのです。ダビデにとってどんなに屈辱的であったかわかりません。それでも彼は「**賛美**」しました。あらゆる時に主を「**賛美**」したのです。

キリスト者の信仰生活には、信仰によって困難を乗り越えて前進する時もあれば、ダビデのようにペリシテの王の前で気が狂ったかのような真似をしなければ自分を守れないような時もあります。しかし、あらゆる時に主を「**賛美**」しなければなりません。なぜなら、そこにも神の守りと助けがあるからです。いやむしろ、そうした中にこそ、もっと深い神の恵みがあるのです。ですから、私たちはイエス様を通して、「**賛美のいけにえ**」を、神に絶えずささげることができるのです。